

氏 名 岡部 真由美

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大甲第 1395 号

学位授与の日付 平成 23 年 3 月 24 日

学位授与の要件 文化科学研究科 地域文化学専攻
学位規則第 6 条第 1 項該当

学位論文題目 現代タイ社会における開発と僧侶－僧侶による社会貢献
とネットワーク形成に焦点をあてて－

論文審査委員 主 査 教授 岸上 伸啓
教授 田村 克己
教授 森 明子
教授 土佐 桂子 東京外国語大学
教授 馬場 雄司 京都文教大学

論文内容の要旨

本論文の目的は、タイにおける上座部仏教の僧侶たちが、開発をめぐる政治社会的変化のなかで、どのように在家者の生活向上に取り組んできたのかを、民族誌的記述を通して明らかにすることであり、また、僧侶たちによる取り組みが何をもたらしたのかを考察することである。

タイをはじめ、厳格な出家主義をとる上座部仏教社会において、僧侶たちは、戒の遵守によって、一切の生産活動から切り離されたサンガ（僧団）を構成し、在家者と明確に区別されている。この区別は、僧侶が在家者にとっての寄進の対象になること、また、在家者に徳を与えること、をそれぞれ可能にするものである。しかし1960年代以降、開発が進展するなかで、一部の僧侶たちが、「社会のために働かなければならない」と考え、農民の貧困解消、エイズ患者のケア、森林保護などの分野において、積極的に在家者の生活向上に取り組むようになった。このような僧侶たちは、やがて、NGOワーカーや知識人らを中心に、「開発僧」と呼ばれるようになった。

タイの上座部仏教に関する人類学的研究は、1970年代以降の急速な社会変化のなかで勃興した、新仏教運動や宗教再生の現象を論じてきたが、「開発僧」はほとんど研究の対象としてこなかった。一方、「開発僧」をめぐるのは、開発論と社会学において盛んに議論されてきた。開発論においては、地域開発に果たす僧侶の役割を、理念と現実を区別しないで論じること、また、社会学においては、観察者の一方的な基準によって特定の僧侶を「開発僧」として実体化して論じること、それぞれ問題がある。

これを踏まえ、本論文では、在家者の生活向上に取り組む僧侶たちを、「開発僧」として実体化して捉える視点を回避し、僧侶たちの取り組みを、彼らを取り巻くコンテクストのなかで民族誌的に明らかにする。そうすることによって、なぜ、僧侶たちが在家者の生活向上に取り組むようになったのか、また、彼らが、従来のタイの上座部仏教のなかでどのように位置づけられるのか、という問いに答えることを試みる。

なお、第2章から第5章の各章における記述・分析の内容は以下の通りである。

第2章では、僧侶たちによる、在家者の生活向上のための取り組みが位置づけられる背景として、タイにおける1960年代以降の開発の進展と仏教の関わりについて明らかにした。1960年代以降、政府によって国家開発への協力を強く要請されたサンガが、僧侶を地域開発に動員するための具体的な訓練計画を開始すると、仏教大学や各地方都市の大寺院も、類似した計画や独自の活動を相次いで開始するようになった。一方1970年代以降、僧侶たちは、NGOワーカーや知識人らから、オルタナティブな地域開発の担い手としての役割が期待され、「開発僧」と呼ばれるようになった。

このような国家レベルの政治社会的背景のもと、一地方寺院の僧侶たちが、どのように在家者の生活向上に取り組んできたのかを具体的に明らかにしたのが、第3章から第5章である。なお、本論文では、北タイ・チェンマイ都市近郊部に位置するドーイサケット郡D寺の事例を取り上げている。

まず、第3章では、僧侶たちを取り巻くコンテクストとして、D寺と周辺地域社会CD村の歴史と現状について詳述し、僧侶と在家者の関係が、宗教領域以外においては希薄であることを明らかにした。D寺は、19世紀末頃から市場を中心に発展した、郡内最大の商

業地、CD村における唯一の寺院である。このD寺は、1970年代後半からの約30年間に、鬱蒼とした森のなかの寺院から、近代的設備が整った一大寺院へと変貌し、他地域から多くの止住者（僧侶および在家の寺弟子）が集まるようになった。日常的には、この止住者たちの役割分担によって寺院運営がおこなわれているため、僧侶と地域社会の在家者との接点は、托鉢や儀礼などの宗教領域に限られている。

第4章では、1980年代以降、このD寺および地域社会において、住職P師が取り組んできたことは、国家からの要請や地域社会からのニーズに応えることによって、サンガおよび在家者からの承認を得ようとする試みであったことを明らかにした。P師は住職に就任後、まず、建造物の建立およびインフラ整備に着手し、続いて国家プロジェクトをいくつも受容することで、沙弥教育のほか、在家者の教育にも力を注いできた。またP師は、居住地、高齢者、エイズの各分野における在家者からのニーズにも応えてきた。在家者との関係が希薄であることを認識するP師が、このような多角的な寺院運営をおこなってきたのは、幅広いニーズに応えることによって、在家者からの名声を獲得し、さらにはサンガ内での肯定的評価を手に入れるためである。

第5章では、1990年代以降、P師の仕事を継承し、在家者の生活向上に取り組んできた若手僧侶I師が、コミュニティ・ケアの運動体と国際NGOという、国家と地域社会のあいだに位置づけられるエージェントからの期待に応え、また、そのエージェントとの関係に自らを位置づけようと試みてきたことを明らかにした。さらに、I師は、在家者の生活向上の取り組む僧侶たちとともに、「北タイ・コミュニティ開発僧ネットワーク」を結成し、各々の取り組みに対する関心を共有し、その具体的な内容やノウハウ、それにまつわる疑問や悩みなどといった、さまざまな知識と経験を交換し合うことを可能にしている。この活動を通して、I師らは、寺院内の師弟関係やサンガのヒエラルキーにみられるような、垂直的な僧侶間関係とは異なり、関心を共有する僧侶たちのあいだに、個別の寺院および地域社会を越えた新しい僧侶間関係を生み出した。

第2章から第5章における記述・分析を通して、本論文では以下の2点を結論とした。すなわち、第1に、タイにおける1960年代以降の開発をめぐる政治社会的変化のなかで、僧侶たちは、国家、NGOおよび地域社会から課せられるようになった要請や期待に応えようとして、在家者の生活向上に取り組んできたのであり、同時に、その取り組みを通して社会からの承認を得ようとしてきたことである。

第2に、僧侶は、在家者の生活向上に取り組むことによって、師弟関係にみられるような寺院内およびサンガ内における垂直的關係や、地縁や血縁にもとづく關係のほか、関心の共有にもとづく新しい僧侶間關係を創出したことである。

北タイ・チェンマイ都市近郊の一地方寺院の事例を考察することによって、本論文が明らかにしたことは、タイにおける1960年代以降の開発をめぐる政治社会的変化のなかで、僧侶たちが在家者の生活向上に取り組むことによって、非宗教的領域における僧侶と在家者のあいだの希薄な關係を回復しようとしてきたことであり、また、その試みが、個別の寺院および地域社会を越えた、新しい僧侶間關係の創出を可能にしたことである。このことはまた、従来、タイの上座部仏教研究において、国家－サンガ－地域社会のなかに位置づけられてきた僧侶たちが、今日、国家と地域社会との中間領域に位置づけられるようになりつつあることを提示しているのである。

博士論文の審査結果の要旨

本論文は、タイ国チェンマイ県の都市近郊における一寺院の事例にもとづき、現代タイにおける開発の進展とそれに伴う政治・社会的変化のなかで、上座部仏教の僧侶たちが、どのように在家者の生活向上に取り組んできたのかを、民族誌的記述を通して明らかにするとともに、その取り組みが何をもたらしたのかを考察しようとするものである。本論文が対象とするのは、寺院を舞台とした開発と福祉とが重なりあう領域であり、現代社会の問題に、人類学のフィールドワークからアプローチした意欲的な研究である。

本論文は6章から構成される。第1章では、上座部仏教に関する人類学的研究、開発と僧侶の関わりに関する研究、「開発僧」研究のそれぞれについて検討している。そして、在家者の生活向上に取り組む僧侶を、「開発僧」として実体化して捉えることの問題点を指摘し、僧侶たちの取り組みを、それぞれの社会的脈絡に即して理解していく必要性を主張する。つづく第2章では、国家レベルで進行した開発と仏教との関わりを検討し、20世紀になって成立した中央集権的なサンガ組織のもとにあった僧侶たちが、1960年代以降の開発の進展にともなって、在家者の生活向上に積極的な役割を果たすことが期待されるようになった政治・社会的な背景を解明している。

第3章から第5章にかけては、北タイのD寺を中心とした現地調査にもとづいて、綿密な民族誌記述と分析を展開し、僧侶たちの取り組みが、歴史的に変化していった動態を浮き彫りにしている。第3章では、1970年代までの僧侶と在家者の関係が、宗教領域以外においては希薄であったことを詳述している。

第4章では、1980年代に、P師が寺院の開発や国家プロジェクトに積極的に取り組んでいた過程を跡付けている。在家者たちのニーズに応え、幅広い取り組みを行ったP師が、サンガ内での肯定的評価や、在家者からの「慈悲深い」僧侶としての名声を獲得していったことを、注意深く描き出している。

第5章では、1990年代になって、寺院および地域社会を越えた取り組みが新たに展開することを詳しく記述する。この新しい動向を描き出すために、若手僧侶I師に焦点をあてる。1980年代のP師とは異なり、1990年代に入るとI師をはじめとする若手の僧侶たちは、コミュニティ・ケアの運動体や国際NGOとの協力関係を築きつつ活動する。岡部は、これらの活動が、国家と地域社会の間に位置づけられるエージェントからの期待に応じていることに注意を向け、それが、関心を共有する僧侶たちの間にネットワークを創出していること、そこに、サンガ組織のヒエラルキー構造とは異なる新しい関係が出現していることを指摘している。

最後に、第6章で全体をまとめ、以下のような2つの結論を述べている。第1は、上座部仏教の僧侶たちは、開発の進展とそれに伴う政治・社会的変化のなかで、国家や地域社会、国内外のNGOからの期待や要請に応えることによって、非宗教的領域における僧侶と在家者の間の希薄な関係を回復し、それによって社会からの承認を得ようとしてきたという指摘である。第2は、このような僧侶たちの実践がもたらしたものとして、寺院内の師弟関係やサンガ内のヒエラルキーにみられる垂直的關係とはまったく異なる関係性を創出しているという指摘である。それは、関心を共有する僧侶同士が作り出す関係であり、寺院や地域社会を超えるネットワークである。こうした関係の構築を考慮することで、今

日の僧侶たちが、国家と地域社会の中間領域に位置づけられつつあることも指摘している。

本論文は、問題設定の新しさと、提示されたデータの質の高さにおいて、現代世界の人類学的研究として、重要な意味をもつ。また、冒頭にも述べたように、僧侶による開発の取り組みを、動態的に明らかにする貴重な民族誌記述でもある。その学問的な意義は、以下のように要約することができる。

(1) これまでの上座部仏教に関する人類学的研究は、村落における僧侶と在家者の関係に焦点をあてることが多かったが、本論文は、タイにおける在家者の生活向上に取り組む僧侶という、現代的で、かつ新たなテーマを取り上げ、グローバル化の影響のもとにある都市近郊の一仏教寺院や僧侶がいかに世俗社会と関わろうとしているかを描き出している。このことは、タイにおける上座部仏教をめぐる人類学的研究に大きく貢献するものである。

(2) 本論文は、のべ26カ月におよぶタイの仏教寺院でのきめこまやかな現地調査を通して収集した第一次資料に基づいて、的確に記述されている。さらにデータを随所に図表化して示しながら、民族誌の文脈の中に適切に配置し、提示している。記述と図表がバランスよく構成されており、北タイの上座部仏教の僧侶の活動に関する、良質な民族誌となっている。

(3) 本論文は、さまざまな志向を持つ僧侶が集まっている寺院に複数の方向から光をあてて、それぞれの角度から見えてくる寺院の輪郭を描き出している。このことで、もっぱら僧侶のみに焦点があてられてきた「開発僧」研究に対し、寺院自体の役割・存在意義をも取り込んだ研究の萌芽を示している。今後、新たな問題領域として展開していくことが期待される。

一方、本論文にまったく問題がないわけではない。たとえば、本論文中で使用されている公共福祉や、コミュニティといった語の用法に多少の曖昧さが認められる点や、僧侶間、あるいは僧侶と在家者の間の葛藤について、もう少し掘り下げて記述することが望まれる点などが指摘された。

しかし、以上の疑問や批判点について、口述試問での岡部の応答は適切なものであった。審査委員会は、この研究の刊行を積極的に進めるべきだという見解において一致しており、上述の用語や記述の問題は、本研究を刊行していく際に、十分克服できると判断した。

従って、審査委員会は本論文がタイの上座部仏教に関するきわめて優れた現代民族誌であるとともに、新たな上座部仏教研究を展開させる可能性をもつものであるとして、全員一致で、博士の学位を授与するに値すると判定した。